

2024

誰一人取り残さない
日本の栄養政策
～持続可能な社会の実現のために～

離島・山間地域における
どの地域も取り残さない栄養改善の取組

目次

• 目次	1
• 本スライドについて	2
• 誰一人取り残さない日本の栄養政策	3
• 離島・山間地域における栄養改善の取組事例	10
• 事例一覧	11
• 北海道中川町 中川町役場	12
• 群馬県下仁田町 下仁田町役場	16
• 東京都新島村 新島村役場	20
• 島根県西ノ島町 隠岐広域連合立隠岐島前病院	24
• 長崎県五島市 長崎県五島中央病院	28
• 愛媛県松山市（中島地区） 社会福祉法人島寿会 特別養護老人ホーム姫ヶ浜荘	32
• 鹿児島県奄美地域 公益社団法人鹿児島県栄養士会 災害支援チーム	36
• 今後の展開と国際貢献に向けて	40

本スライドについて

2021年12月、日本政府の主催により東京栄養サミット2021が開催された。2021年は、世界栄養目標2025の達成期限まで約5年、SDGsの達成期限まで約10年の年であり、これらの国際目標の達成に向けて栄養改善の取組の一層の拡大・強化が課題とされた。

そこで、同サミットにおいては、多様な関係者に対し、自らが実践していく栄養改善活動の内容をコミットメント（誓約）としてまとめることを呼びかけ、78カ国・181のステークホルダーから396のコミットメントが発表された。日本政府は自らのコミットメントの項目として、「誰一人取り残さない日本の栄養政策」の更なる展開と、その進捗や成果について、2023年度から毎年発信していくことを示した。

本スライドは、2023年度に行った国内外への初回の情報発信に続き、2回目の情報発信に、日本の離島・山間地域において、地域住民を対象に実践されてきた「誰一人、どの地域も取り残さない栄養改善の取組」に焦点を当て、その進捗や成果を取りまとめたものである。

誰一人取り残さない
日本の栄養政策

日本は100年以上にわたり栄養専門職を養成してきた

日本は栄養に関する取組を、古くは明治維新(1800年代後半)の頃から行ってきた。1924年には、栄養欠乏の解消に向けて、食事指導や給食管理のための人材を養成するため、佐伯矩（さいきただす）博士が「栄養学校」を設立し、栄養専門職の養成が始まった。その後、1947年に制定された「栄養士法」によって栄養士の養成が法制化された。

現在、日本には管理栄養士と栄養士という、栄養士法に規定された2つの栄養専門職の資格がある。このうち、管理栄養士は、より高度な専門的知識・技術を有する人材に与えられる免許資格職であり、国家試験の合格が必須である。

<日本における栄養専門職資格の概要>

種別	管理栄養士	栄養士
	厚生労働大臣により免許付与	都道府県知事により免許付与
配置規定のある主な施設	特別な 栄養指導・給食管理が必要な施設 ・高度な医療を提供する病院 ・医学的な栄養管理を必要とする給食施設 等	栄養指導・給食管理が必要な 一般の施設 ・病院・児童福祉施設・事業所 ・学校・老人福祉施設・更生施設 等
免許要件	養成施設での規程単位の修得	
	管理 栄養士国家試験 の合格 (試験科目: 臨床栄養学、公衆栄養学 等)	

離島・山間地域を含む全国に管理栄養士・栄養士を配置

日本では管理栄養士・栄養士の配置が法令に規定されており、さらに、その対象となる施設は医療機関や高齢者施設、学校等、非常に多岐にわたる。このような配置規定は、1947年制定の「保健所法(現：地域保健法)」において保健所への栄養士の配置が規定されたことに始まる。

以降、様々な施設への配置が各種法令により規定され、それらを根拠として全国への配置を確実に進めてきた。このほか、管理栄養士・栄養士は民間企業、研究機関等にも勤務し、各現場で栄養改善に取り組んでいる。

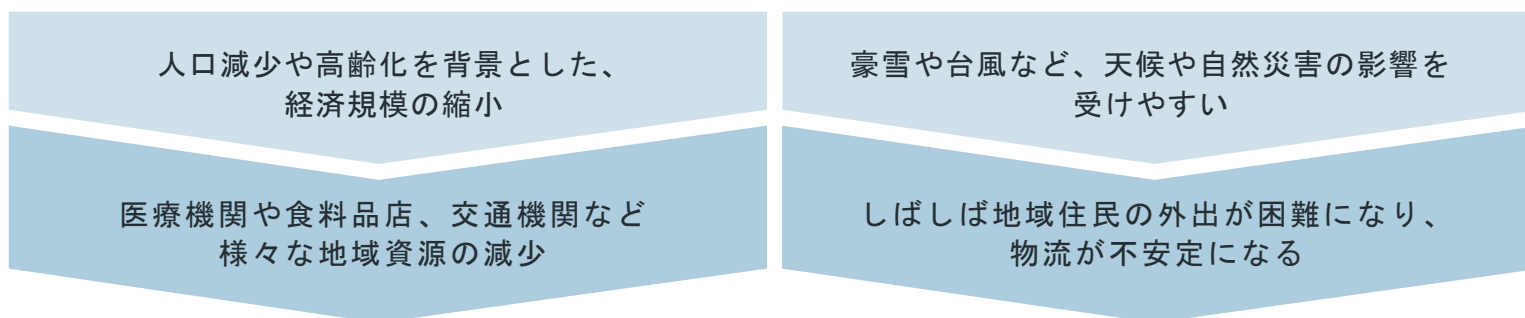


離島・山間地域には 特有の健康・栄養関連課題が存在している

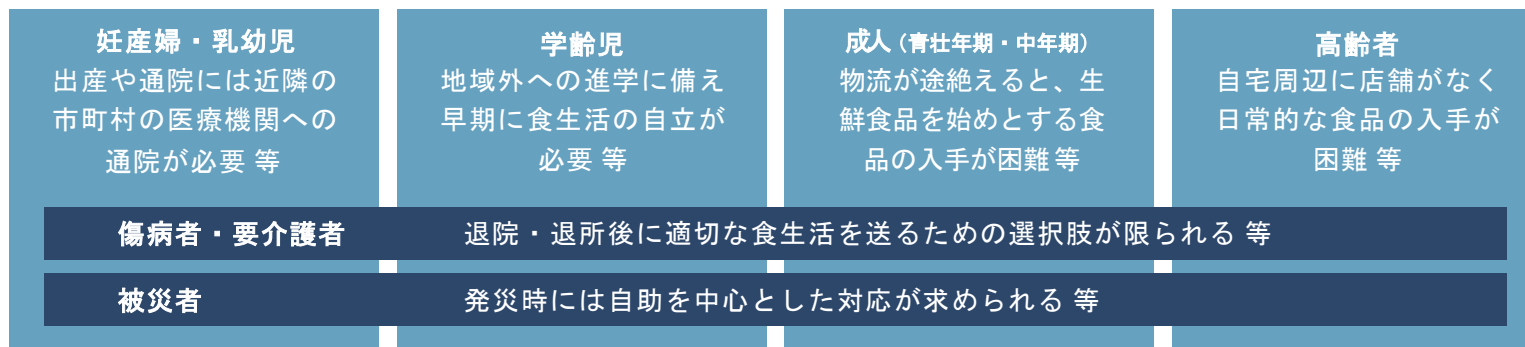
離島・山間地域は、人口減少や高齢化を背景に、経済規模が縮小し、また、天候や自然災害の影響を受けやすいといった特性がある。

こうした状況下、いずれのライフステージにおいても、特有の健康・栄養関連の課題が存在している。

< 離島・山間地域における健康・栄養関連の課題 >



いずれのライフステージにおいても、特有の健康・栄養関連の課題が存在



「誰一人、どの地域も取り残さない栄養改善の取組」により課題解決を図る

日本は離島・山間地域においても、その地域の管理栄養士・栄養士を中心に、全ライフステージを対象とした栄養改善の取組が行われている。

下記のような全ライフステージを対象とした栄養改善の取組を行う上では、その地域で健康・栄養面で取り残されている人がいないかを把握し、組織の枠組みを超えて必要な支援を行うことが重要となる。

管理栄養士・栄養士が、離島・山間地域に暮らす一人の住民として、周囲の住民と関係を構築し、そこで暮らす住民を理解することにより、地域にある栄養課題を明らかにし、取り残されている、又は取り残されるリスクが高いのは誰なのかを把握することができる。これと並行して、日頃の業務を通じて得た気づきを裏付けるためのデータを集め、エビデンスに基づいて効果的な施策を実施することが重要となる。

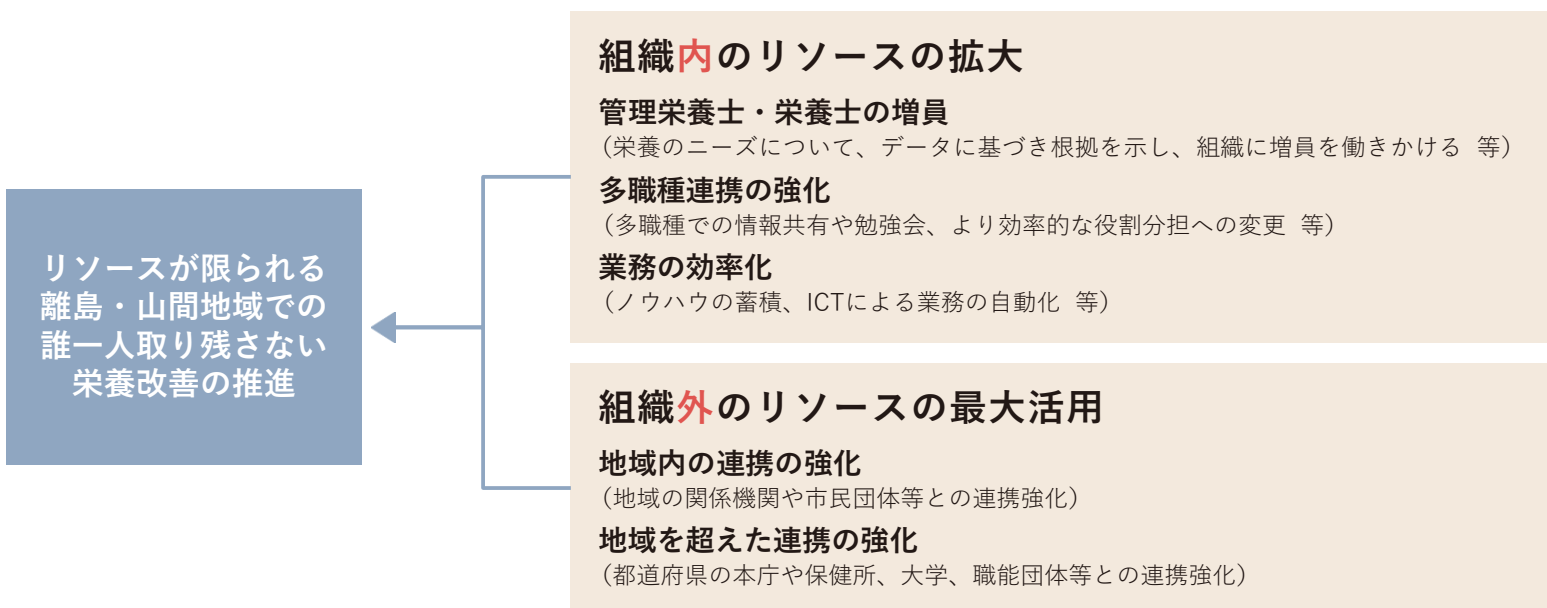
<各ライフステージ及び傷病者・要介護者や被災者に対する取組例>

妊産婦・乳幼児	学齢児	成人（青壮年期・中年期）	高齢者
・ 妊娠時の栄養相談 ・ 妊産婦・乳幼児健診 等	・ 学校給食 ・ 栄養教育 等	・ 保健指導 ・ 栄養相談 等	・ 栄養相談 ・ 訪問栄養指導 等
傷病者・要介護者	医療・介護施設等での栄養指導、配食サービス 等		
被災者	平時の備え、発災時の対応を行う相互支援体制の構築 等		

全ての地域住民を支援するため、 リソースの拡大・最大活用に取り組んできた

都市部では、人口が多く、管理栄養士・栄養士が複数名配置されている施設や組織も多いことから、業務分担の下、誰一人取り残さない栄養改善に取り組むことができる。一方、離島・山間地域では、管理栄養士・栄養士の配置が限られており、その地域に一人しか配置されていないことも珍しくない。

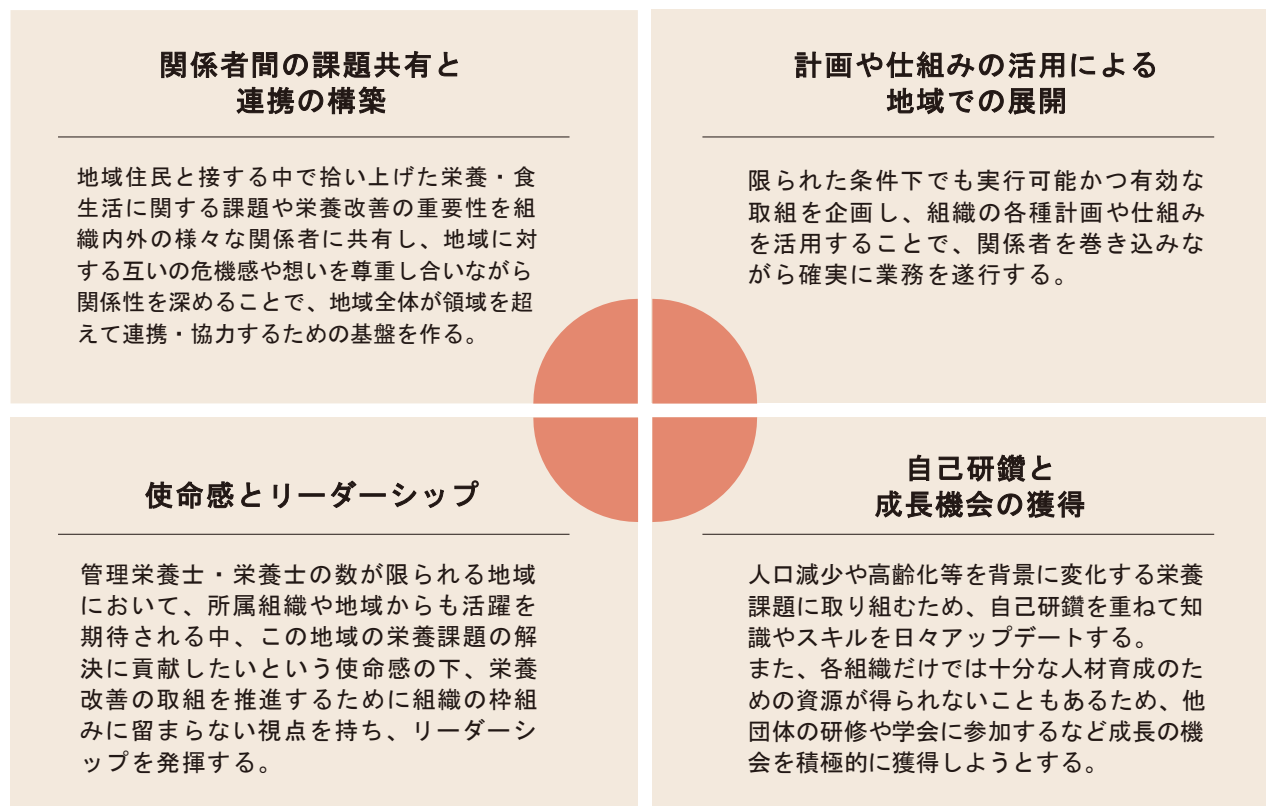
このように、管理栄養士・栄養士が少ない地域においては、特に、誰一人取り残さない栄養改善の推進に当たり、組織内外のそれぞれにおいて、人・物・情報等のリソースの拡大・最大活用に取り組むことが必要不可欠となる。



離島・山間地域では 栄養改善の取組を促進する4つの要因がある

日本の離島・山間地域では、リソースを拡大・最大活用しながら「誰一人、どの地域も取り残さない栄養改善の取組」を実施していくに当たり、4つの促進要因が重要な役割を果たしている。地域の状況や取組内容によってこの4つの促進要因の軽重は異なるが、いずれの離島・山間地域においても共通して重要となるものである。

< 離島・山間地域における、誰一人取り残さない栄養改善の取組の4つの促進要因 >



離島・山間地域における 栄養改善の取組事例

事例一覧

本スライドでは、離島・山間地域における7つの取組事例を紹介する。

いずれの事例においても、管理栄養士がその地域に応じた方法で「誰一人、どの地域も取り残さない栄養改善の取組」を推進している。



No.	分野	取組地域（市町村）／組織	事例のポイント
①	行政	北海道中川町／ 中川町役場 幸福推進室	学校給食のない町の唯一の管理栄養士が、生涯にわたる健康の実現を目指し、栄養改善の司令塔として総合的な取組を実施
②	行政	群馬県下仁田町／ 下仁田町役場 保健課	役場の管理栄養士が調整役となり、地域一丸となった住民主体の栄養改善を推進
③	行政	東京都新島村／ 新島村役場 さわやか健康センター	管理栄養士が地域連携のハブとなり、村内の栄養専門職と共に一体的かつ継続的な栄養改善の取組を実施
④	医療	島根県西ノ島町／ 隠岐広域連合立隠岐島前病院	地域で唯一の有床病院の管理栄養士として、患者一人ひとりに寄り添った栄養管理を通じて地域医療に貢献
⑤	医療	長崎県五島市／ 長崎県五島中央病院	自治体が実施する事業を活用し、通院が難しい遠隔地の高齢患者等への栄養食事指導を実施
⑥	介護	愛媛県松山市（中島地区）※1／ 社会福祉法人島寿会特別養護老人ホーム姫ヶ浜荘	島唯一の介護保険施設の管理栄養士が、親しみやすい専門職として地域福祉にも目を向けた栄養改善の取組を実施
⑦	防災	鹿児島県奄美地域※2／ 公益社団法人鹿児島県栄養士会災害支援チーム	日本初の離島地域の災害支援チームを養成し、地域の文化を尊重しながら住民の自助・共助の力の向上に尽力

※1 本スライドでは松山市と合併した旧中島町の行政区域を「中島地区」としています。

※2 本スライドでは奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の8つの有人島から成る地域（奄美群島）を「奄美地域」としています。

事例①

ながわちょう

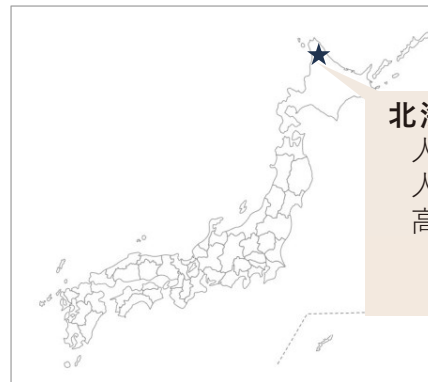
しあわせすいしんしつ

北海道中川町 | 中川町役場 幸福推進室

学校給食のない町の唯一の管理栄養士が、生涯にわたる健康の実現を目指し、栄養改善の司令塔として総合的な取組を実施

地域の紹介

中川町は北海道の北部に位置しており、北見山地と天塩山地に挟まれ、町の中央を国内4位の長さとなる256kmの天塩川が流れる、南北に細長い町である。寒さが厳しく、積雪も非常に多い地域であるため（年間平均気温5.9度）、畑作の北限地域とされている。また、酪農業も盛んに行われている。



北海道 中川町

人口	1,304人
人口密度	2.4人／km ²
高齢化率	39.6%※1

(2024年2月時点)

※1 65歳以上の割合

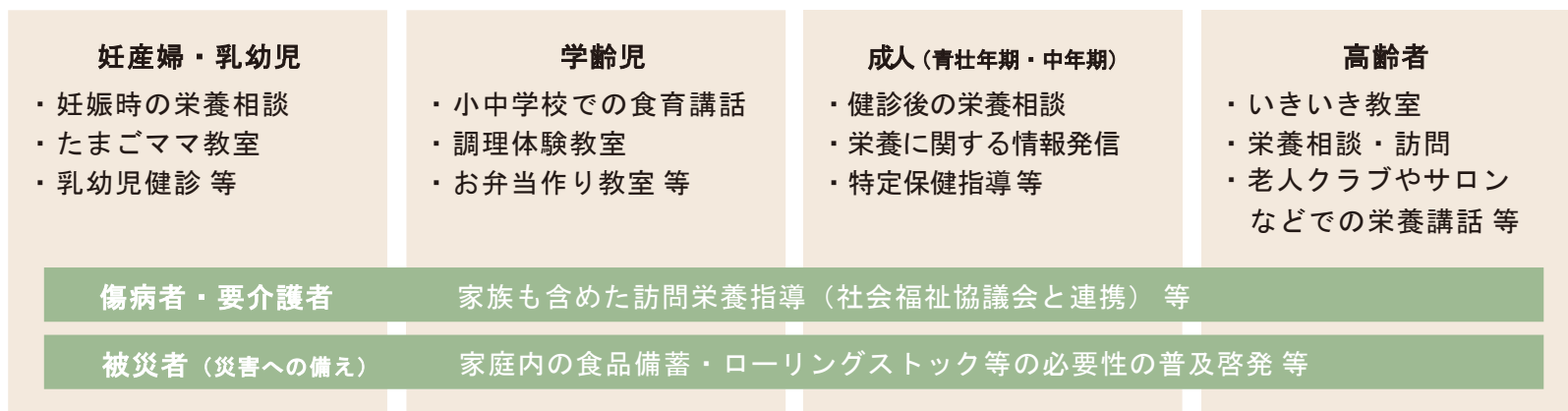
取組内容や促進要因の全体像はレポート（P.16-19）をご参照ください。

中川町は学校給食を実施しておらず、町内に栄養教諭の配置もないため、役場の管理栄養士が町で唯一の栄養専門職であり、全てのライフステージの栄養改善の取組を実施している。

■ 限られたリソースの中でも、誰一人取り残さない栄養改善の取組を推進

取組の実施に当たっては、町役場の管理栄養士が取組の司令塔として機能している。具体的な取組方針は、町の食育推進計画に示されており、周囲の関係組織や関係団体と協力して各取組を推進している。

中川町の栄養改善の全体像



■ 給食がない中で子どもたちへの継続的な栄養教室に注力

中川町では、「生涯にわたって健康で豊かな生活の実現」を掲げる食育推進計画を策定し、計画の中で各ライフステージの課題や目標、それらに対する具体的な対策や生活の各場面（家庭、学校、地域）での取組を具体化している。

その中でも、学齢期からの適切な食生活の実践と定着を目指し、特に子どもたちへの栄養教室に注力している。町内に高校がなく、進学のために町を離れる子どもが多い中、小学校や中学校での栄養教育を通じて、継続的に栄養に関する知識を伝えている。



小学校での栄養教室

役場の管理栄養士は、健康増進を主眼とする町の食育推進計画の下、地域での栄養改善の取組の司令塔として機能している。

■ 課題を共有し、関係者自身にどう関与すべきか理解を促している

中川町での栄養改善の取組の推進に大きな役割を果たしているのは町の食育推進計画である。この計画の策定に当たっては、役場の管理栄養士が中心的な役割を担いながら、「生涯にわたって健康で豊かな生活の実現」に向けた町内の具体的な課題と、そうした課題に対して各ライフステージにおいてどのように進めることが必要かを明確にした。

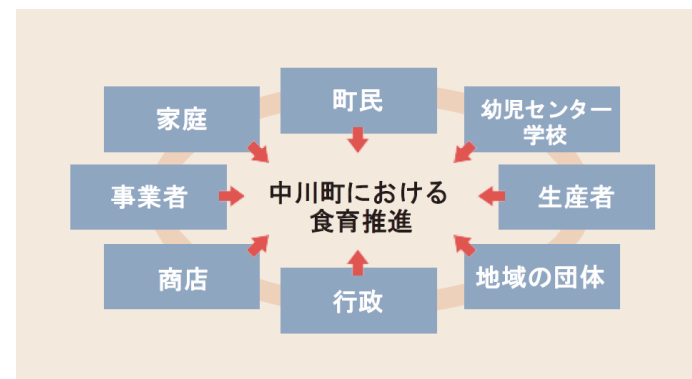
こうしたことを通じ、町として目指すべきビジョンと進め方を関係者と共有でき、関係者自身がどのように取組に関与していくべきかについて理解を深めることができた。

■ 地域の各種団体と協力関係を築きながら、計画の実施に関与してもらえるように努めている

中川町では、食育推進計画の実施に当たって地域の各種団体や町民と協働した活動となるよう、協力関係の構築にも尽力した。例えば、役場の管理栄養士が商工会議所や商店と協力体制を作り、地元の商店に減塩食品コーナーを設置してもらった等、食環境の整備につなげた。

このほかにも、町内の事業所、郵便局等での健康講話や資料の展示など、住民同士の距離が近い小規模自治体のメリットを活かしながら、地域住民や関係団体の栄養改善や健康増進に対する意識を醸成し、積極的に取組に関与してもらえるよう尽力している。

栄養改善の推進体制



※中川町食育推進計画（第4期）より

地元商店での減塩食品コーナーの設置



町内の事業所健診での資料展示

担当管理栄養士のご紹介

町民の皆さんが、生涯にわたって健康的に過ごせるように

■ 所属、氏名

北海道 中川町役場
幸福推進室 主査 植本満さん

■ 経歴及び入職後の業務

2012年に中川町役場に入庁。その後、幸福推進室の管理栄養士として、町の食育推進計画の策定・実行や計画に基づく栄養改善業務全般を担当。

■ 今後の目標・抱負

高校進学のために親元を離れる子も多い中、栄養教室などを通じて子どもたちに親身に寄り添える点にやりがいを感じます。

引き続き、栄養に関する情報発信や、子どもから高齢者まで全ライフステージの住民への栄養改善の取組を通じて住民と関わりを持ちながら、適切な栄養・食生活を理解して健康的に過ごすことができる方を増やしたいと思います。

そして、家庭や地域で、次の世代へつなげていく食育や栄養改善の取組が住民運動となるように、今後も取り組んでいきます。



子どものお弁当作り教室



高齢者向けの健康講座

事例②

しもにたまち

群馬県下仁田町 | 下仁田町役場 保健課

役場の管理栄養士が調整役となり、 地域一丸となった住民主体の栄養改善を推進

地域の紹介

下仁田町は群馬県南西部の長野県との県境に位置する。町の総面積のうち、約85%が山林及び原野で占められており、町の東部に小規模な平野が形成されているものの、大部分が山腹の複雑な傾斜地であり、平坦部は少ない。町の周囲を標高1,000mを越える急峻な山々が囲む。年間平均気温12.1度、降雪は年に2、3回程度となっており、比較的穏やかな気候である。



群馬県 下仁田町

人口	6,300人
人口密度	33.4人／km ²
高齢化率	53.2%※1

(2024年2月時点)

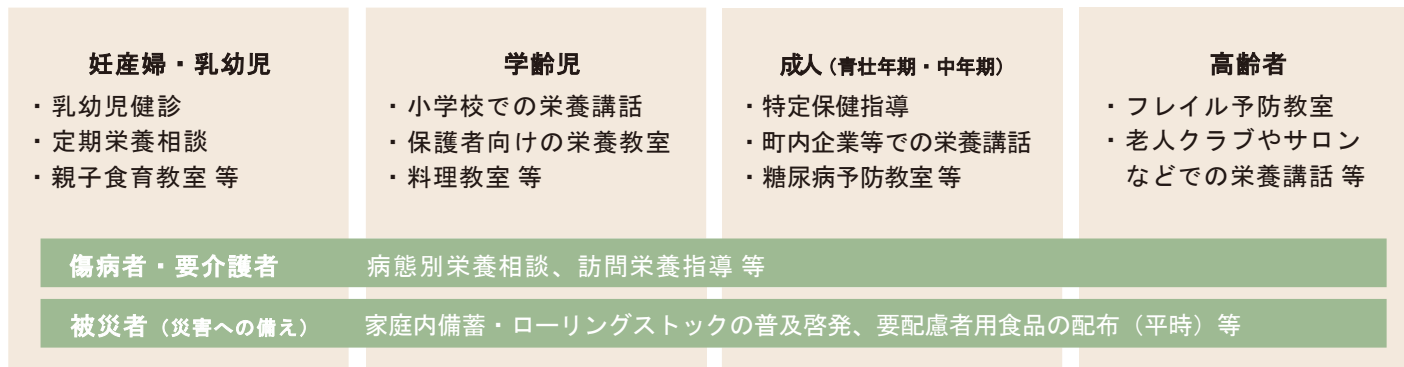
※1 65歳以上の割合

下仁田町では、健康増進に向けた全ライフステージへの取組を実施しており、
これらは地域の主体的な取組によって推進されてきた。

■ 町民の健康増進に向けた全ライフステージへの取組

下仁田町では、役場の管理栄養士は主に3つの業務を担当している。1つ目が住民の栄養指導・栄養教育であり、保健師と連携して乳幼児健診や糖尿病予防教室、栄養面で注意を要する地域住民への個別栄養相談や訪問栄養指導を実施している。2つ目は地区組織との協働・活動支援であり、食生活改善推進協議会の事務局として、食生活改善推進員の養成や会員との連絡調整を実施している。3つ目は食育推進であり、地域の団体や住民との連携に加え、食生活改善推進員とともに小学校での調理実習や、保育園児・小学生を対象とする栄養講話、高齢者サロンでの講演等を実施している。

下仁田町の栄養改善の全体像



■ 食育推進計画策定を契機とする連携体制の構築

全ライフステージに対する取組を進めるに当たり、下仁田町では、地域の団体や住民が主体的に町の栄養改善の取組に関与しており、群馬県や県内の大学の支援を受けながら、役場の管理栄養士が調整役として機能している。

こうした体制は、2013年に町が食育推進計画策定に当たって推進会議を設置したことが契機となっている。町ぐるみの方針の下、地域の団体や住民を始め、地域が一丸となって主体的な活動を行ってきた。



食育つたえるプロジェクト

地域の主体的な取組を推進するため、役場の管理栄養士は調整役となり、栄養改善や健康増進に向けて関係者が「取り組みたいこと」を実現できるように支援している。

■ 役場の管理栄養士が調整役となり、関係者の「取り組みたいこと」の実現に向けて支援している

下仁田町では、長年にわたり、役場の管理栄養士が地域の組織や住民と顔の見える関係を築きながら、関係者が主体的に取組を実施できる環境を作ってきた。

住民の自主性を尊重し、地域の健康づくりのための事業を様々な立場の組織や町民が協働して行うことで、横のつながりを強化し、地域一丸となった健康づくり・栄養改善を推進してきた。

この際、役場の管理栄養士は、自ら先頭に立つのではなく、調整役として関係者の「取り組みたいこと」の実現に向けてコーディネートし、住民が気持ちよく栄養改善の取組を進められるように支援してきた。

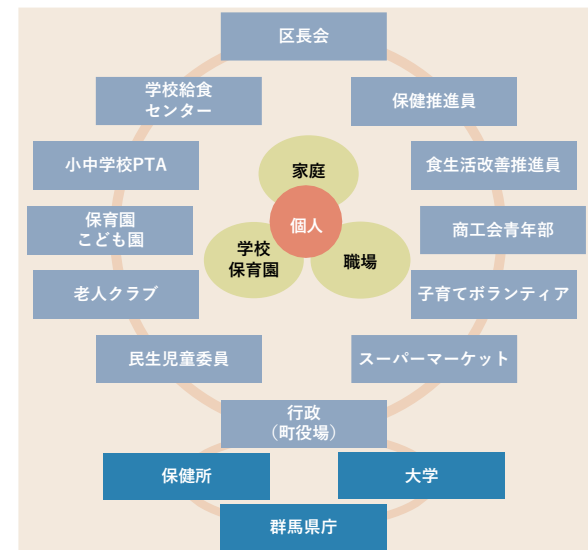


食生活改善推進員の活動支援

■ 県や大学が持つリソースや自治体間の横の連携を活用し、地域の取組を進めている

下仁田町では、食育推進計画の策定に際して、群馬県の本庁や保健所、地元の大学の支援を受けることができた。市町村では調査等に関する専門的なノウハウを十分に有していない場合がある中、様々なネットワークを持つ県や専門的知見を有する学術研究機関との連携は非常に有効であった。

通例、市町村ではリソースが限られ、栄養改善の取組に困難を伴うこともある中、県が主導・支援して、県保健所管内の地域で一体的に課題解決を図る体制が構築されている。こうした体制の下、下仁田町は、県の富岡保健福祉事務所や管内の他の自治体と様々な情報共有や意見交換などを行い、日々の業務に活かしている。



栄養改善の推進体制

担当管理栄養士のご紹介

積極的に地域に出向き、そこに暮らす住民をよく知る

■ 所属、氏名

群馬県 下仁田町役場 保健課
管理栄養士 赤岩友紀さん

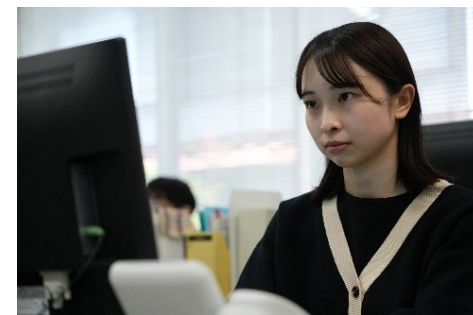
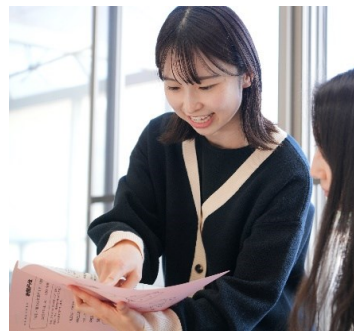
■ 経歴及び入職後の業務

2021年に下仁田町役場に入庁。保健課の管理栄養士として、住民への栄養指導や栄養教育、食生活改善推進協議会の活動支援、食育の推進など、町の栄養施策の推進を担当。

■ 今後の目標・抱負

下仁田町では、役場の先輩管理栄養士が、長年にわたり住民との間で築いてきた信頼関係と、それを土台とするネットワークがあります。このつながりを将来につなげるため、私も調整役として積極的に業務に取り組んでいきたいと思っています。

また、地域住民の暮らしに寄り添い、地域に根差した取組を進めるため、積極的に地域に出向いて住民と直接関わりを持ちながら、地域とそこに暮らす住民を深く理解した管理栄養士になりたいと思っています。



食育推進計画実行委員会の様子



住民主体の取組

事例③

にいじまむら

東京都新島村 | 新島村役場 さわやか健康センター

管理栄養士が地域連携のハブとなり、村内の栄養専門職と共に 一体的かつ継続的な栄養改善の取組を実施

地域の紹介

新島村は東京から約160km離れた伊豆諸島の新島及び式根島の2つの島から成り、約2,500人の住民が暮らしている。年間を通じて温暖な気候（平均気温17.6度）であり、主要産業は観光業や漁業が中心となっている。東京都内とは、小型飛行機やフェリーの定期便が就航するとともに、2つの島を結ぶ連絡船もある。



東京都 新島村

人口	2,450人
人口密度	89.0人／km ²
高齢化率※	41.0%※1

（2024年2月時点）

※1 65歳以上の割合

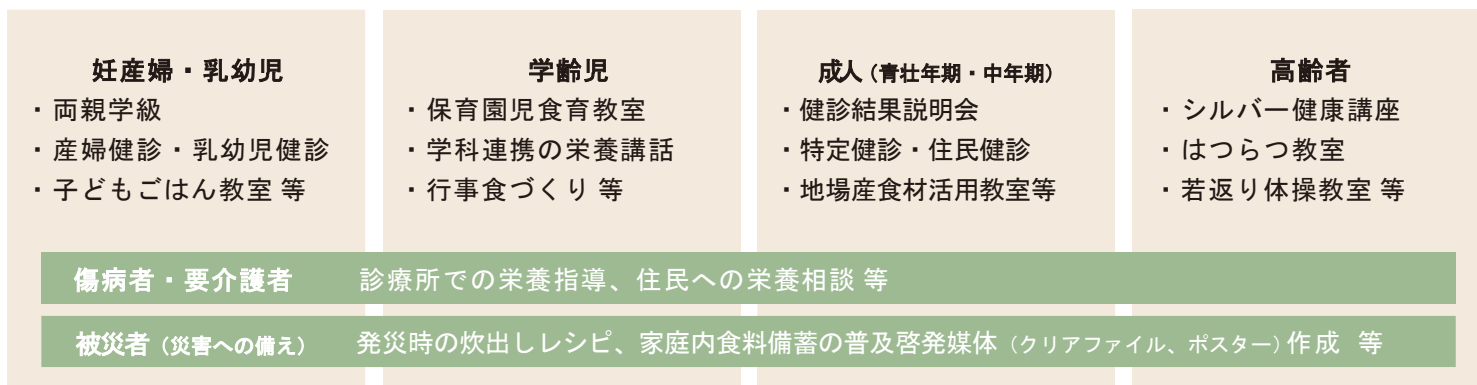
新島村では、役場の行政管理栄養士が中心となり、地域の関係者と連携して栄養改善の取組を推進できる体制を構築することで、全ライフステージに対する栄養改善の取組を実施している。

■ 限られたリソースの中でも、誰一人取り残さない栄養改善の取組を推進

新島村では、さわやか健康センターに所属する行政管理栄養士1名があらゆるライフステージの栄養施策を担当している。

また、行政管理栄養士が、診療所での栄養指導も担当し、住民との栄養相談やフォローアップの面談等をきめ細かにを行いながら、慢性疾患の発症予防と重症化予防に努めている。

新島村の栄養改善の全体像



■ 課題の共有を通じて関係者間のつながりを構築し、地域のリソースを最大活用する

新島村では、村内の栄養・食生活の状況を調査して課題を明確にした上で、役場内の他職種や村内で従事する管理栄養士・栄養士に共有した。その結果、地域内で課題解決に取り組む関係者間のつながりが生まれて各機関で個別に行っていた取組の情報が共有されるとともに、それぞれの取組を結び付けた一体的な取組を進めることが可能となった。

また、役場の行政管理栄養士だけでなく地域内の各プレーヤーにとっても、直面する課題に対して共に考え行動できる協力者を増やすことにつながった。

役場の管理栄養士は、自身の専門性を地域に還元して住民の栄養改善や健康増進に貢献したいとの想いをもち、課題解決に向けて、前例のない取組であってもその実施に向けて粘り強く行動している。

■ 地域への愛着と住民のために自分の知識を還元したいとの想いが強力な原動力となっている

食品へのアクセスや医療資源、人的リソースなど、多くの面で制約がある新島村ではあるが、日々の生活の中で住民と管理栄養士が頻繁に顔をあわせながら信頼関係を築くことができしており、管理栄養士として各住民の生活・食生活に対する深い理解を有している。

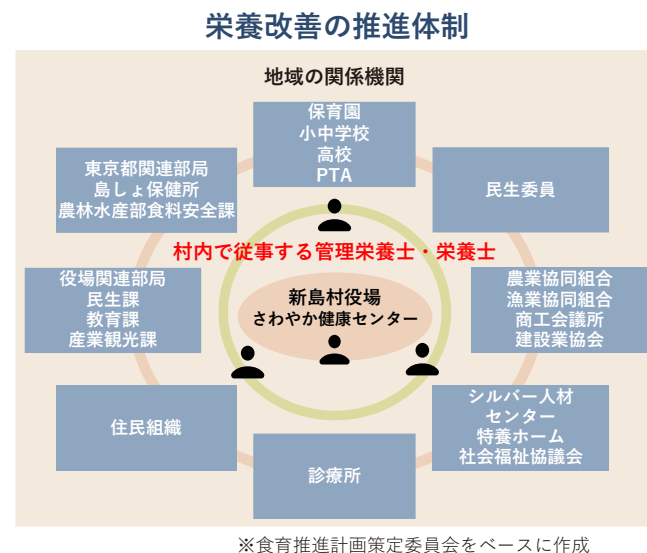
この結果、管理栄養士が、住民一人ひとりのライフスタイルに合わせたきめ細かな栄養相談やその後のフォローアップを行うことを可能とし、対象者が真に望む支援を具体的にとらえて提供できている。

この基盤となるのは、管理栄養士が持つ一人の住民として地域での生活を楽しむ気持ちとその土地への愛着である。こうした気持ちを出発点として、自身が持つ専門知識を地域に還元して住民の栄養改善や健康増進に貢献したいという想いを生むことにつながっている。

■ 前例のない課題に対しても解決に向けた熱意を持ち、取組の実現のために組織内の関係者との交渉・調整を粘り強く続ける

取組の推進に周囲の理解が必要になる中、前例のない取組はより難しいものであるが、役場の行政管理栄養士は、地域住民の健康を守るために先行事例などの情報収集を地道に続けてきた。そして組織内の関係者や関連部局と粘り強く交渉し、理解を得ながら計画の立案と実行に向けた調整や関係構築、体制づくりを実現してきた。

こうした管理栄養士の課題解決に向けた強い想いと周囲の関係者を巻き込むために具体的な行動に移す力は、取組の推進にとって重要なポイントとなった。



担当管理栄養士のご紹介

離島の生活を楽しみ、暮らしから栄養課題を拾い上げる

■ 所属、氏名

東京都 新島村役場 さわやか健康センター
主任管理栄養士 遠藤律子さん

■ 経歴及び入職後の業務

2009年に新島村役場採用。さわやか健康センターで行政管理栄養士として、村の栄養改善業務全般を担当。

■ 今後の目標・抱負

離島での生活を楽しみながら、一人の住民として地域のことを考え、自分の知見をどのように地域住民の皆さんの生活に還元していけるかをしっかり考えていきたいと思います。そのためにも、関係者との情報共有を重ね、協力関係を更に強くしながら栄養課題の解決に取り組んでいきたいです。

また、将来性のある管理栄養士・栄養士の育成にも引き続き力を入れ、島内外からの事業見学の受入れや学生の研究への協力、悩みを抱える若手からの相談対応などに、引き続き取り組んでいきたいと考えています。



子どもたちへの栄養授業

事例④

にしのみまちょう

おきこういきれんごうりつ

おきどうぜんびょういん

島根県西ノ島町 | 隠岐広域連合立隠岐島前病院

地域で唯一の有床病院の管理栄養士として、患者一人ひとりに寄り添った栄養管理を通じて地域医療に貢献

地域の紹介

西ノ島町は、島根半島から北東へ約65kmの日本海に浮かぶ隠岐諸島にある。隠岐諸島の中で人が住む島は4島あり、そのうちの3島（西ノ島、中ノ島、知夫里島）は「島前（どうぜん）」と呼ばれる。西ノ島町はこの3島のうちの西ノ島を占めており、1つの島で1つの町を形成している。

本土とはフェリーと高速船で結ばれており、島前の他の島とも定期内航船で行き来することができる。



島根県 西ノ島町

人口	2,548人
人口密度	45.5人／km ²
高齢化率	48.6%※1

(2023年12月時点)

※1 65歳以上の割合

管理栄養士は、日々の全人的ケアを通じて、患者一人ひとりに対する理解を深め、
患者の希望に寄り添った食事の提供に努めるなど、栄養面から地域医療を支えている。

■ 地域で唯一の入院可能な有床病院の管理栄養士として多様な状態の患者に対応する

栄養科に所属する管理栄養士の2人は、院内の給食業務や病棟での栄養管理、入院・外来の栄養食事指導を担当している。急性期から慢性期までの各患者の状態を把握し、患者の病態、身体状況を踏まえるとともに、患者の嗜好にもできるだけ沿った食事の提供に努めている。

高齢者が多い地域であるため、特に摂食・嚥下機能の低下や食思不振が見られる患者が入院することも多い。そのため、管理栄養士は栄養管理をきめ細かく行えるよう、食事の時間は病棟に行き、食事の様子を観察したり、各病室を担当する看護師や患者の主治医と相談したりしながら、迅速に食事などの調整を行っている。また、患者の家族とも頻繁に情報共有を行い、患者の入院前の食事の状況や好きな料理などを把握し、可能な限り患者に楽しんで食事をしてもらえるよう工夫している。



ラウンドの様子

■ 患者一人ひとりを理解し、その人に寄り添った栄養管理を行う

隠岐島前病院では「愛ある医療サービスを提供する」を合言葉として、「病気を見るだけではなくその人自身を見ること」を大切にしている。

管理栄養士も全人的ケアを担う一員として、患者の現在の健康や栄養の状態だけでなく、その患者のこれまでの生活を理解し、本来はどのような食事・食生活を望んでいるのかということも汲み取りながら対応するように心がけている。

また、西ノ島町の郷土料理を給食として提供する「わがところメニュー」を実施したり、地域の味付けにできるだけ準じるようにしたりするなど、日々工夫を凝らしている。



近隣の隠岐の島の郷土料理
(右上) いか大根 (右下) さざえ味噌

管理栄養士は、自己成長への意欲や、地域で共に暮らす人々の健康を栄養面から支えたいという想いの下、島内外の成長機会を活用して常に新しい知識を習得しながら日々の業務に取り組んでいる。

■ 各管理栄養士が目的意識を持って日々の業務に取り組んでいる

管理栄養士2人のうち1人は、地域医療に携わることを通じて管理栄養士としてのスキルを磨きたいとの想いで島外から入職した。もう1人の管理栄養士は、生まれ育ったこの島で住民の健康の保持増進のため、自身が身に付けた栄養の知識をもとに貢献したいと考えて勤務している。

こうした動機や地域への愛着が日々の業務を行う上で大きな原動力となっている。

■ 島内外の成長機会を積極的に活用して新しい知識を習得している

患者に寄り添ったきめ細かな栄養管理を行うには、日々の自己研鑽が欠かせない。管理栄養士は栄養に関連するカンファレンスや回診等に参加し、患者の状況を正確に把握するとともに、院内の他の専門職との情報共有や連携強化に努めている。加えて、定期的に院内で開催される多職種との勉強会への参加など、院内の知見を有効に活用しながらスキルアップを図っている。

また、院外の成長機会も大いに活用している。離島の管理栄養士にとって本土で行われる研修会に出席することは容易ではない中、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴いオンラインでの研修会が増加したことを好機ととらえ、県栄養士会などが開催するオンライン研修会に積極的に参加している。また、これと並行して、地域の管理栄養士・栄養士との情報交換も定期的に行っている。このようにして、新しい知識の習得や情報収集に努めている。

院内の他の専門職との情報共有はもとより、こうした外部の成長機会を活用して、多様な状態の患者に対して限られたリソースの中でも栄養食事指導を始め栄養管理を適切に実施できている。また、こうした管理栄養士の自己成長への強い意欲と、それを実現するための日々の自己研鑽が地域での栄養改善の取組を支える柱となっている。



カンファレンスの様子

担当管理栄養士のご紹介

先輩管理栄養士の支援の下、自己研鑽に努める

■ 所属、氏名

隠岐島前病院 栄養科 管理栄養士 朝鍋けいとさん

■ 経歴及び入職後の業務

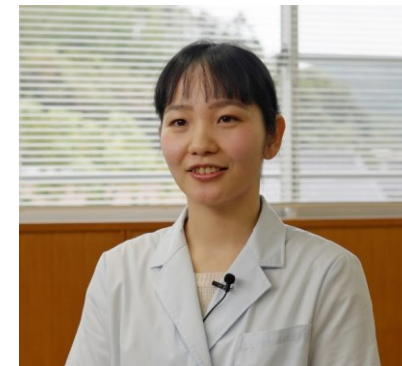
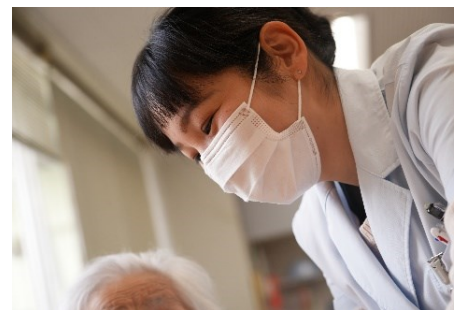
2022年に隠岐島前病院の管理栄養士として入職。入院患者の栄養管理や給食業務、栄養指導を担当する。

■ 今後の目標・抱負

私は、元々島外で働いていましたが、地域医療に携わること
で管理栄養士としてのスキルアップを図りたいと考えて当院で
働くことを選びました。

ここでは、1人の管理栄養士に幅広い業務と複雑な栄養状態
の患者さんへの対応が求められ、常に最新のエビデンスに基づ
いた情報が必要となるため、日々自己研鑽に努めています。

まだ学びたいことが多くあるため、先輩管理栄養士や周囲の
専門職に支えていただきながら、日々の業務をしっかりと取り
組んでいきたいと思えます。



ミールラウンド

事例⑤

ごとうし

ながさきけんごとうちゅうおうびょういん

長崎県五島市 | 長崎県五島中央病院

自治体が実施する事業を活用し、通院が難しい遠隔地の高齢患者等への栄養食事指導を実施

地域の紹介

五島市は、九州の最西端、長崎県の西の海上約100kmに位置している。大小152の島々からなる五島列島の南西部にあり、10の有人島と53の無人島で構成される。五島列島最大の島が福江島であり、島の東部に行政機関や空港・港、商業施設などが集まっている。この地域は対馬暖流の影響を受けており、年間平均気温は17.4度と比較的温暖な気候である。

長崎県 五島市

人口	34,408人
人口密度	81.9人／km ²
高齢化率	42.5%※1

(2024年2月時点)

※1 長崎県市町別年齢別推計人口(2023年10月1日時点)の65歳以上の割合



地域医療における中心的な役割を担う基幹病院の管理栄養士として、入院・外来患者の栄養食事指導や入院患者の栄養管理、他職種からの栄養に関する相談などに対応している。

■ 地域の基幹病院の管理栄養士としての役割を果たす

長崎県五島中央病院（以下、五島中央病院）は地域の基幹病院であり、管理栄養士は、子どもから高齢者までの、また、急性期・回復期・慢性期といった様々な状況の患者に対応している。

管理栄養士の主な業務としては、入院・外来患者への栄養食事指導や入院患者の栄養管理がある。特に栄養食事指導に注力しており、指導件数も年々増加している。

また、栄養サポートチームや摂食嚥下ラウンドの一員として、多職種連携による栄養管理も行っている。さらに、行政からの依頼に応じて、一般住民向けに高齢者の栄養・食生活に関する講話なども行っている。



栄養ラウンド

■ 地域で中心的な役割を担う病院の管理栄養士として、責任感を持ちながら自己研鑽に励んでいる

五島中央病院は基幹病院として多様な役割を担っているため、そこで勤務する管理栄養士に対しても地域の関係者から期待が集まる。そのため、地域内で新たな取組を始める際には真っ先に相談を受けるような立場にある。

行政や関係団体から地域の課題解決に向けた取組の相談を受けることも多い。

こうしたことにしっかりと対応するため、日ごろから新しい情報やエビデンスを学び、自身の知識やスキルをアップデートしている。



栄養サポートチーム研修会
（嚥下食試食風景）

五島中央病院は、市が実施するオンライン診療機器を搭載した巡回診療車両を活用したモバイルクリニック事業に協力するとともに、管理栄養士によるオンラインでの栄養食事指導を行っている。

■ 五島市が実施するモバイルクリニック事業に協力し、 通院が難しい遠隔地の高齢患者に対してオンラインでの栄養食事指導を行う

医療資源が相対的に不足する島の遠隔地域では、定期的な診療が必要な慢性疾患を有する患者の通院が難しく、近年増加しているオンライン診療も、高齢者自身がデジタル機器を操作することの難しさが障壁となっている。

こうした中、五島市では、医療機器や通信機器を設置した専用の巡回診療車両（モバイルカー）が患者の自宅付近まで行き、車両に同乗した看護師のサポートを受けながら、患者がオンライン診療を受けられるスマート巡回診療推進プラン（モバイルクリニック事業）を2023年1月から開始した。本事業の導入時にオンラインによる栄養食事指導を導入できないかという相談があり、関係各所との協議を経て五島中央病院の管理栄養士が担当することとなった。



巡回診療車両
(モバイルカー)

■ 市の事業への協力により、院外関係者とのネットワークが広がり、自身の活動範囲の拡大につなげている

モバイルクリニック事業は、慢性疾患を持つ患者のうち、足腰が弱い、認知機能の低下、移動手段がないなどの理由で医療機関へのアクセスが難しくなった高齢者等の利便性の向上や地域課題の解決を目的としている。

本取組は、市の糖尿病重症化予防の取組として位置付けられ、住民の健康・栄養状態の向上に寄与している。

病院や管理栄養士単独では取り組むことが難しい「通院できない地域の高齢者の栄養改善」という課題の解決に向けて、市に協力して市の事業を上手く活用したことは、院外関係者とのネットワークを広げ、自身の活動範囲を拡大する上で非常に有効であった。



オンラインでの栄養食事指導

担当管理栄養士のご紹介

常に自身をアップデートしながら新しいことにチャレンジする

■ 所属、氏名

長崎県五島中央病院 栄養科
管理栄養士 江頭清美さん

■ 経歴及び入職後の業務

2004年に長崎県五島中央病院に入職。長年にわたり入院・外来患者の栄養食事指導、入院患者の栄養管理を担当してきた。

■ 今後の目標・抱負

私は、地域の基幹病院の管理栄養士として、長年に渡り、地域の関係者から、多様なご相談をいただきました。その中には、新しい取組も多く、苦労も多かったのですが、その度にしっかりと役目を果たそうと取り組んできました。

今後は、引き続き、自らのスキルアップに取り組むとともに、新しく仲間になった若手の管理栄養士の成長を支援して、患者さんや地域の方々の栄養改善に皆で取り組んでいきたいと思えます。



摂食・嚥下ラウンド



糖尿病学会九州地方会での発表

事例⑥

なかじま

ひめがはまそう

愛媛県松山市（中島地区） | 特別養護老人ホーム姫ヶ浜荘

島唯一の介護保険施設の管理栄養士が、親しみやすい専門職として地域福祉にも目を向けた栄養改善の取組を実施

地域の紹介

松山市の中島地区は、松山市本土の北西約15km、広島・山口両県の県境に接する瀬戸内海西部に位置する忽那（くつな）諸島の一部であり、6つの有人島と22の無人島から構成されている。特別養護老人ホーム姫ヶ浜荘がある中島（なかじま）は、忽那諸島の中で最も面積の広い有人島である。

中島と松山市本土との間には高速船及びフェリーが毎日運航しており、島内では柑橘類の生産が盛んに行われている。

愛媛県 松山市（中島地区）

人口	2,781人
人口密度	74.6人／km ²
高齢化率	68.4%※1

（2024年2月時点）

※1 65歳以上の割合
（住民基本台帳登録者数より算出）



島で唯一の介護保険施設の管理栄養士として、施設での業務に加えて、地域高齢者の栄養改善にも取り組む。

■ 施設での栄養ケア・マネジメントと地域への貢献を両立する

姫ヶ浜荘の管理栄養士は、島で唯一の介護保険施設の管理栄養士として施設入所者の栄養ケア・マネジメントを担当しており、入所者の栄養管理や栄養指導を行っている。

施設では給食を業務委託しており、松山市本土から仕入れた冷凍された食事を施設の厨房で再加熱して提供している（クックチル）。そのため、施設利用者の状況に合わせて献立を調整するとともに、地元の新鮮な食材を使ったおやつを提供するなど、施設利用者が楽しんで施設生活を送れるよう、食生活の面からサポートしている。

こうした中、施設の事務長から「地域福祉にも目を向けて欲しい」との助言を受けたことを契機に、地域高齢者の栄養改善の取組にも関心を持つようになった。以来、管理栄養士として地域のために何かできることはないかと考えながら、高齢者を対象とした支援や食事イベントの開催などを行っている。

■ 栄養の専門家として周囲の人のために何かしたいという想いが取組の原動力になっている

地域高齢者が抱える栄養課題にも目を向けるようになる中で、一人の管理栄養士として、地域の栄養改善にも貢献したいという想いを強く持つようになった。そのためにも、地域住民に施設や管理栄養士が身近で頼りになる存在と感じてもらうとともに、憩いの場として活用してほしいと考えており、こうした考えから施設外の専門職との連携の模索やイベントの企画・実施につながった。

このような管理栄養士の「施設利用者や地域の高齢者のために専門家として何かしたい」という責任感・使命感が取組を進める上で重要な原動力となっている。



施設でのおやつイベント



入所者の栄養状態の確認



地域住民を招いた食事イベント

管理栄養士は、島の様々な集会や関係者の元に自ら出向いて「姫ヶ浜荘の管理栄養士」と覚えてもらい、親しみやすい専門職として地域住民と信頼関係を築きながら取組を進めている。

■ 施設から積極的に地域に出て関係性を築くことで、地域の栄養改善を効果的に推進している

地域福祉に関する取組を進める中、施設の管理栄養士として3つの点を意識してきた。

第一に、島の社会的リソースの把握である。島の関係者に直接会いに行き、取組の土台となる人間関係の構築に努めた。第二に、「姫ヶ浜荘の管理栄養士」として地域住民に認知されることが重要と考え、地域の集会などに参加し、高齢者や他の専門職とコミュニケーションを図るようにした。第三に、施設で使用する食材を島内の商店から購入するなど、地域の活性化を図りながら住民と持続的な協力関係を築くように心がけてきた。

その結果、最近では「姫ヶ浜荘の管理栄養士」の認知度が高まるとともに、地域の商店とのコミュニケーションをとる中で施設の食材調達をお願いできるようになるなど、地域の様々な関係者とのつながりができ、これが施設外での取組を進める上で大きな基盤になっている。



地域住民とのコミュニケーション

■ 単なるつながりから連携体制の構築に発展させている

地域の専門職との間でも地域の栄養・健康課題を共有し、解決に向けて連携できる体制を構築している。例えば、地域のケアマネジャーや保健師と情報交換をする中で、地域包括支援センターからケアマネジャー向けの講話を依頼され、実施した。現在はそこで得たつながりを活用して一層の連携強化を図っている。

入職以来培ってきた施設外の関係者との信頼関係は、地域の栄養改善に向けた連携体制の構築にまで大きく発展してきた。今後更に取組を推進していくための原動力となることが見込まれる。



ケアマネジャー向けの栄養講話

担当管理栄養士のご紹介

親しみやすい管理栄養士として地域福祉にも貢献する

■ 所属、氏名

社会福祉法人島寿会 特別養護老人ホーム姫ヶ浜荘
管理栄養士 今井亮太さん

■ 経歴及び入職後の業務

2020年に特別養護老人ホーム姫ヶ浜荘に入職。施設利用者の栄養ケア・マネジメントを担当するとともに、地域高齢者の栄養改善にも取り組む。

■ 今後の目標・抱負

私は、当施設の管理栄養士として着任して3年目です。まずは施設利用者の食事内容をより充実させ、皆さんに喜んでいただくとともに、栄養状態の改善を図りたいと思います。

その上で、地域福祉を支え、地域の活性化にも貢献できるよう、管理栄養士として栄養改善につながるイベントを企画し、定着化させていきたいと考えています。また、施設外の専門職からも栄養・食生活について相談されるような、地域の皆様にとって親しみやすい管理栄養士として取組を行っていききたいと思います。



ケアプラン会議

事例⑦

あまみ

鹿児島県奄美地域 | 公益社団法人鹿児島県栄養士会 災害支援チーム

日本初の離島地域の災害支援チームを養成し、
地域の文化を尊重しながら、住民の自助・共助の力の向上に尽力

地域の紹介

奄美地域は、鹿児島県本土から南西に約380km離れた奄美大島を始めとする島しょ地域である。気候は亜熱帯海洋性で、四季を通じ温暖（年間平均気温21.8度）で、降水量は全般的に多い。夏季は台風による災害が多い。

2010年に奄美大島で発生した奄美豪雨災害は、記録的な集中豪雨による河川の氾濫や土砂災害のため、道路交通網のみならず情報通信網も同時多発的に途絶するなど、これまでに経験したことのないような大規模なものであった。

鹿児島県 奄美地域

人口	104,281人
人口密度	84.1人／km ²
高齢化率	35.0%※1

（2020年国勢調査）

※1 65歳以上の割合



鹿児島県栄養士会では、日本初の離島地域の災害支援チームを養成。養成研修を修了した管理栄養士は、各職域で日々の業務に尽力しながら地域住民への防災の普及啓発活動等に取り組んでいる。

■ 養成研修を開催し、離島における災害時の栄養・食生活支援の専門家を養成している

鹿児島県栄養士会災害支援チーム（以下、JDA-DAT鹿児島）では養成研修を開催し、災害時の栄養・食生活支援の専門家の養成に取り組んでいる。

奄美地域における養成研修は、様々な職域に従事する管理栄養士・栄養士を対象に、3日間のカリキュラムで開催され、座学だけでなく非常食の調理や試食等の演習も含まれる。

また、災害時の食事の在り方だけでなく、避難所運営や被災者とのコミュニケーションスキルなど、災害対応に求められる幅広い内容を取り扱っている。



養成研修の様子（非常食の調理）

■ 立ち上げから約3年間で11人の災害支援の専門家を養成できた

JDA-DAT鹿児島では、2007年以降これまで計4回の養成研修を重ねてきた。2020年には、関係機関や関係者の支援を受けながら奄美地域で初めての養成研修を実施した。

現在では、職場の異動等もあり奄美グループは計11人がメンバーとして所属する。いずれも、30代～60代の管理栄養士であり、病院や高齢者施設、市町村等の様々な職域で勤務しつつ、ボランティア活動として参加している。

災害時の栄養・食生活支援において活用されるバッククッキングは、平時でも活用しやすい調理法であるため、介護予防教室などの場で紹介すると、参加者から非常に喜ばれることが多い。



養成研修を修了したメンバー

地域内で災害対応を完結できるよう、平時から地域住民の自助・共助の力の向上に取り組むとともに、地域内の関係機関との連携体制の構築を進めている。

■ 修了生が地域住民への啓発活動を実施、自助・共助の力の向上に取り組む

養成研修の中で学ぶバッククッキングなどの災害時の対応について、専門家だけでなく地域住民が学び実践できるよう、普及啓発活動に取り組んでいる。

例えば、奄美市の地域包括支援センターからの依頼を受け、高齢者を対象にした介護予防教室の栄養講話を担当し、その中で災害時の対応等に関する普及啓発を行っている。

また、地元FMラジオへの出演や、奄美大島で開催される「土木フェスタ」（鹿児島県建設業協会主催）に出向き、調理の実演やワークショップ、展示を行うなどの啓発活動を展開している。



地域でのイベントへの参加

■ 保健医療機関だけでなく、地域の企業やメディアとも連携し 地域全体の防災能力の向上に貢献している

奄美地域では、島内で完結できる災害時の栄養・食生活支援の実現が必須であり、そのために島内の各機関との関係構築が非常に重要となる。

そこで、養成研修を企画する段階で、実際の災害発生時を想定して災害拠点病院や医師を始めとした地域の防災の主要な関係者に講師を依頼するなど、関係構築に取り組んでいる。

また、地域の関係者や団体との間で役割を明確化し、取組の効果を高めるために書面で協力関係を確認している。そうした際の事務手続等は県栄養士会が担っており、後方支援を通じて地域での活動を支えている。



避難所運営に関する演習

担当管理栄養士のご紹介

地域の仲間を増やし、活動の範囲を広げる

■ 所属、氏名

JDA-DAT鹿児島

統括リーダー 山下雅世さん（右）

奄美グループ 宮崎むつ子さん（左）

■ 経歴及び入職後の業務

山下さん）鹿児島県の職員として県庁や保健所等での業務を担当。2007年鹿児島県栄養士会第1回スタッフ養成研修を開催、翌年JDA-DAT鹿児島設立に尽力し現在に至る。2012年日本栄養士会JDA-DAT初代運営委員として全国展開の整備にも尽力。

宮崎さん）病院や診療所での給食管理・栄養管理・在宅栄養指導等の業務に従事。JDA-DAT鹿児島には2021年から参画。

■ 今後の目標・抱負

山下さん）JDA-DAT鹿児島の理念「ひとり一人の『おもい』を大切に、One for all-All for one」を大切に、仲間とともに県民の命を守る栄養支援活動を続けてまいります。

宮崎さん）次世代の栄養士・スタッフ養成をどう行っていくか悩みは尽きませんが、同じ想いを持った仲間を増やし、点の活動を面に広げていきたいと思っています。



住民への啓発活動

今後の展開と
国際貢献に向けて

■ 国内においても知見が共有され、取組が一層推進されることを期待する

本スライドは、紹介した7事例と同様の離島・山間地域はもとより、これらの地域と連携する保健所や自治体、これから管理栄養士・栄養士を目指す方々や養成施設の教職員にも参考になると考えている。また、都市部においても、離島・山間地域における取組を知ることは、その地域の取組を振り返るための視点を得ることにつながる。

日本国内の栄養改善の取組を一層推進し、持続可能なものとするためにも、これらの知見を活用していただきたい。

■ 日本の知見を世界に発信することによる、国際貢献を目指す

前述のとおり、日本では100年以上前から栄養専門職の養成を開始し、離島・山間地域を含む全国に管理栄養士・栄養士を配置してきた。そして、これらの人材が全国各地で「誰一人、どの地域も取り残さない栄養改善の取組」を実施しており、組織内外のリソースの拡大・最大活用や管理栄養士・栄養士の思い・専門性に関する4つの促進要因が重要なポイントとなっている。

長きにわたり離島・山間地域における栄養改善に取り組んできた日本のこうした知見の中には、各国の取組に活用できる多くの示唆が含まれていると考える。

日本は、東京栄養サミット2021の開催を契機に、栄養改善の機運を一層高めるため、日本の100年以上の栄養改善の取組の経験や知見を世界に発信し、栄養課題の解決、ひいてはその先に達成されるであろう持続可能な社会の実現に貢献していきたいと考えている。